

文学と思想の命運(2)昭和文学の一動向

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

34

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

1986-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019461>

文学と思想の命運(二)

—昭和文学の一動向—

立石 伯

(二) 真継伸彦論

虚構のもつ顕著な特質は、作家の思考や想像力を越える或る力を内在させている点にある。作品が読まれつつける一つの大きな理由は、この或る力が読者に作品の解読を迫るからである。読者は自らの属している時間と空間のなかで或る力に気付き、それとの内的な対話を始めるのであるから、きわめて個別的なものであり、その読者の関心や志向と密接な関係のもとにある。或る力などと曖昧な呼び方をしているのもこういう理由のためである。したがって、それはあらゆる作品に内在されるものではないし、誰も気付かなかった所に突然見出されたり、あるいは忘れ去られたりするものである。これらは作家とは無関係の領域で生ずる精神的出来事であるので、作家たちがなんらかの衝動、選択、決意、志向などによってペンをと

ること、一つの虚構の世界ができれば区別されるべきものとしてある。

真継伸彦は「言葉の始源について」で、小説を書く原動力を、恐怖と震撼だとのべている。あるいは自己の存立が根底からゆるがされた時、生きる正しい意味づけを暗示するような△新しい言葉▽の追究だという意味のことをものべている。彼がリルケやハイデガーに導かれたり、ドストエフスキーから強い啓示をうけたのが右のような考えを抱く一つの要因となっただろうことは疑いない。ここで注意しておくべきことは、彼がしばしば△観察▽とか△傍観者▽とかという観念で自らの作家としての位置を語っている点である。これは『鮫』のような一種の歴史小説をかいた作家として語りだされた考えに違いないにせよ、彼の方法の核心に触れる面を有しているはずだからである。そして、この稿のモチーフとして割愛せざるをえないが、こうした方法意識が、森鷗外の歴史小説論やより一般化

されたそれらとどういふ対応関係を有するか興味深い側面を開いて
いるからでもある。

ともあれ、真継伸彦はきわめて倫理的な作家である。倫理・宗教
的という言葉が『仏教のこころ』をはじめとする数冊の仏陀や親鸞
論等、『親鸞全集』の現代語訳等の仕事に於て形容されるのではな
い。その発想の根底に、生と死、つまり人はなぜ生きるか、如何に
生くべきか、死とは何か、如何に死すべきかといった一見古めかし
い追究課題が横たわっているからである。こうした主題はたとえ時
代の好みに合わぬことがあっても、まだ十分解き明かされていない
のだから、全力をあげて取り組む作家がいて当然なのである。その
上に、すでにハイデガーの名前をあげたように、彼がしばしば引用
する「なぜ有るものがあり、反対に無がないのか」という存在論的
な問いかけをも問いつづけているのである。いかえれば、彼は武
田泰淳や野間宏などが追究した仏教とマルクス主義の問題、埴谷雄
高が追究している存在のあり方などを徐々に解き明かそうとも意図
しつづけている。その作品世界が重苦しく晦渋な面を含んでいるの
も故なしとしない。しかしながら、仏教的な救済、マルクス主義的
な理想や自己解放、存在の転変の相などを虚構世界のうちで構造化
するのは大変困難な営みである。真継伸彦がこれらの課題にどう直
面し、どのように生命化しているか検討することがさしあたり必要
となってくるだろう。次に、仏教とマルクス主義の問題を追究する
途上で必然的に浮彫りにされる改宗と転向の相がいかなるものか吟
味さるべきであろう。

私は昭和三八年から四四年にかけて「文芸」に発表された三連作

『鮫』『夜明け』『無明』について素描しておく。前もって、三作
品を貫くモチーフをのべておけば、自己とは何か、歴史的な一状況
に置かれた一人の人間の意味は何か、救済とは何かという問の線上
に展開される性質のものである。作者のいい方に従えば、応仁の乱
直後にはじまり、天正年間に終る一向一揆の歴史を追究することに
よって「私とは何か」と問うことである。

作者は主人公の一人を、乱世にあって経済的、社会的にもっとも
強く圧迫、差別される、被差別部落出身の子供に設定した。そうす
ることによって、三〇余年の人生に於て主人公の体験した憎悪、呪
詛、恐怖、飢餓、情欲などが何に由来し、どのようににはけ口を見出
していくか追尋したかったのである。いかえれば、越前坪江庄に
生まれ差別と貧困にあえぐ鮫とよばれた絶望的な幼年時代、都に出
奔して六条河原の疾風とよばれた野盗の少・青年時代、親鸞以来本
願寺の執事をつとめた下間一族の姓をたまわるに至った越前吉崎時
代の下間蓮見を構想することによって、作者は一つの歴史時代を自
分なりに追体験したのである。そして、この過程で蓮見は、解決不
可能な両極の真実に逢着する。一極は彼に信仰の本質を啓示した蓮
如の娘・見玉尼である。

「『くりかえし』、念仏申されませ。そなたの極楽往生は、ただ一
度の念仏で決定けちじょういたしております。(中略)されど、そなたに
あたえられた信心は、いつかきつと、いつわりの信心になりかわ
るであろう。それゆえに、南無阿弥陀仏とくりかえし申されませ。

(中略) 疾風殿、南無阿弥陀仏と申します心は、いつでも身を
捨て、やすらかに死にまするといふ心じゃ。それゆえに、疾風

殿、死んでいなされ。生きながら、死んでいなされ。』(『鮫』)
北国の信仰を正すべく吉崎にくだった蓮如は確かに多くの成果をおさめた。敬虔な信徒を育てあげ、浄土の意味を大衆に感得させることができた。蓮見も信仰に目覚めた一人である。けれども、蓮見の苦悩は、信仰のもつある深淵をのぞき見ることによって深まっていた。信仰を持続させることの困難、もう一つは教義を布教するにあたって成立する教団の墮落である。つまり、作者は、蓮如・見玉尼的な信仰の背後で大きく顔をのぞかせている教団と教団史の問題を鋭く表面化することで、教義(思想)の辿らねばならぬ痛切な一つの真実を描出しなければならなかったといえる。

蓮見は、死の彼方だけを見る信心一途な見玉尼と異なって、本願寺の僧侶たちが現世と死後、穢土と浄土を同時に見なければならぬこと、また相似た信仰を抱くもの同士が殺しあわねばならぬこと、こうした事態が教団護持の八牙Vを必要とするに至ることを悟らねばならなかった。蓮如のうちに彼が見たものこそ、すぐれた信仰者と教団の指導者であらねばならぬ者の絶望であった。

彼に見玉尼のような信心が不可能であったわけではない。逆説的でない方をすれば、彼は余りにも八私Vについて問いかけすぎたのである。自己の实在、虚妄を問い、「釈迦如来とは、肉身と言葉を離れたその『おのれ』を、生きているうちに見抜かれたお方」とみなしつつ、「おのれの欲念の源泉をみきわめてこれを断ち、寂滅の境地を志向せん」(『夜明け』)と思いつつも、彼の出自と成長史が現世の八私Vを縛りつけすぎたのである。彼は仏法者のごとく生きながら死ぬことができなかったということもできる。なぜか。彼

の過去の生き方と在り方が、今一人の師・下間蓮崇の論理を超越できなかったからである。蓮崇は、衆生に迎合して弘まっていた浄土真宗の墮落、救済の不平等性などを批判しつつ、一切の衆生を救済するためには一部の衆生の犠牲をいとわぬといいつのり、次のごとき考えを披瀝する。

「御上人様、信心をひろむるためには、信心を捨てねばなりません。おれは申し上げた。心に鬼を飼わねばなりません。衆生は御上人様のお姿より行いを学びます以上は、外見はあくまでも清浄でなければなりません。されど、陽なたのうるわしい信心と、陽かげの権謀術数と、うわべの正義と、蔭のうらぎりと、両輪がなければ布教は達せられませぬぞ。(中略)ただ一言、仏法のために闘えと門徒に命じてくだされませ。」

「蓮見、なにゆえにかようなおろかしい事態がおこっておる？ 仏法が国法となりえぬゆえじゃ。それゆえに、われらは第一歩より新しく発足せねばならぬ。最も容易な浄土真宗の一派をもって、全国の衆生の信心を統一しなければならぬ。転宗する者はすべてを迎える。敵する者は、たとえ如何なる高僧であれ殺さねばならぬ。」(『夜明け』)

蓮見は、私であって私でない、死んでいて死んでいない仏の境地ではなく、蓮崇の修羅の論理をうけ入れたのである。彼は仏法を国法とするために現実の政治権力と権威にすがらざるをえなくなったのだが、その時、地獄おちをも同時に承認したわけである。また、見玉尼と蓮崇の両極に裂かれ、一方しか選択できぬ実存者の罰があるとするれば、それをも凝視したいと思つたのである。

ところで、蓮見が飢饉の村より拾いあげた光明丸（心源）の活躍する『無明』の世界では、宗教政治の世界がくりひろげられる。蓮如臨終前後の指導権争いはうまく描かれているが、蓮如の娘・珠光尼は本願寺は繁栄するにつれて墮落していくと鋭く批評する。『ここに住む者のだれひとりとして、かつての父上のように、「自信教人信」の教えを身をもってつらぬく者はおらぬ。心源、これが本願寺の秘密じゃ。吾等は信心がもはや消えうせたことを秘密にして、かわりに権威でもって信徒にのぞまねばならぬのじゃ』」宗教的指導者の世襲制や権威に頼る教団のあり方は、愚昧この上ないものだが、作者は、教団の指導層の問題にも考察をすすめる。蓮如なきあとの愚直な指導者・実如との関係を心源は次のようにとり結ぼうと考えた。

「『信心の裏側に、悪の華嚴の世界がある。しかしそのなかで生きぬくということが、実は信仰者の自由である。自分の知情意のかぎりをつくして生きうることである。……蓮崇殿は信心なくして蓮如上人と同様自由に生きられた。殿は如来のかわりに蓮如上人を信じられたゆえである。それは、うわべは信心を事としながら、陰では権謀術数を事とし、人を象棋の駒や基石のように用いる残忍非道な仕事であった。慈悲に生きながら無慈悲に生きることであった。しかし私は、自分が蓮如上人や蓮崇殿と同様、非道な仕事を冷然と、しかも熱情をこめて為しうる人間であることを知っている。私は下間蓮見殿のように戦場にはでぬ。実如上人を傀儡のようにあやつって、知恵の戦を敢行するのである。』」心源のいう自由と不自由、信心と不信、宗教と政治などは、たと

えば、ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』の「大審問官」詩劇の中心的テーマの一つであった。イヴァンの驚くべき構想力のうみだしたものを、真継伸彦は加賀の一向一揆の歴史過程のうちにも見出したのであった。

視点をかえていえば、この連作は、仏陀と親鸞、親鸞と蓮如の差異を大きな枠組として、理想とその現実化の方法、いわば思想とその実践の機微を描出しているのである。あるいは天上の真理と地上の権威の問題を仏法と国法の関係に於て考察しているということもできる。したがって、私たちは転向や転宗、指導者と大衆などの関係を任意にとりだして、自在に語ることもできるだろう。これは作品の読みかえが可能であることを示しているにしても、作品の価値評価とは直截つながらない。この点のみに局限していえば、私には作者の眼があまりにも明晰すぎるように思える。あるいは、作者の構想力が冴えすぎていて、細部にまで気が配られているので、冒頭にのべたごとき或る力の作用がそがれているということもできる。

武田泰淳は『異形の者』『快樂』などで、仏教と教団の問題とマルクス主義と前衛党の問題とをパラレルに解き明かそうとした。作品の未完にもかかわらず、仏教、教団、指導者と大衆、分派問題、目的と手段、共産主義、党組織などきわめて観念的にみえる問題を文学的な問へと転化しつつ、高度なかたちに昇華しえた。したがって、私たちは、宗教的・政治的な狂信、人間を犠牲にする政治や宗教のありよう、自由や平等を口にしながら桎梏と差別を強める布教や実践活動などを個々の具体的イメージとして体得できる。教義やイデオロギイの表裏が同時に開示されてあるので、私たちは素朴な

思考を投げすて、事物や人間の奥深くを覗きこむ思惟を獲得できるはずでもある。

野間宏の『わが塔はそこに立つ』も、マルクス主義と宗教の問題をあつかって、一つの達成を示している。彼は武田泰淳よりも性の問題、悪や救済について目を集中させているし、青春特有のさまざまな葛藤や背反を友人関係のなかに探ってもいる。そして、両者は宗教の問題についての考察で差異を見せるが、前者は浄土真宗の在家仏教の一派であり、後者は浄土宗の教団組織の上層部に属することにより一因をもち、考察領域の相違として結果するのである。これはそう大きな問題でなく、異質な文学世界を開くわけでもないが、無視することのできないものとしてある。ここでは詳しく論じる余裕がなく、この両者と真継伸彦の文学の同質性と差異の一端を念頭に置いて貰えればよいのである。

より具体的にいえば、『快樂』、『わが塔はそこに立つ』と真継伸彦の『林檎の下の顔』（昭和四六年九月～四八年十二月）「人間として」『文芸展望』と『青空』（五七年四月一九日～五八年三月二六日）『毎日新聞』の自伝的小説の特徴を比較してみればよからう。その根本的な違いは、僧侶ないしは新興宗教の教祖の家に生をうけたために、幼少時から仏教に親しみあるいは反撥した強烈な体験を有するものと、実業家（電柱販売業）の家に生れたものの出自にかかわるだろう。彼が真剣に親鸞あるいは仏教について思惟しなければならなくなったのは、彼の文章に従えば、ほぼ二十代の半ばに乱脈な生活をつづけ、自律神経失調におちいついた頃、『選択本願念仏集』や『歎異抄』などに出会ったためである。それ以前は既述

のごとく、ドストエフスキイ、リルケ、キルケゴール、ハイデガー等への親炙について語りうるだろう。

二つの自伝的小説は、八おれは死ぬまで翼々たる小心を抱きつづけるよりほかはない、と断念したとき、彼は四十歳にちかくなっていたV精神の混沌をあつかったものだが、主に大学卒業までを中心とする。したがって、両親、兄妹、親族、学校の友人たちの肖像や死、読書体験などが詳述され、特に精神の彷徨としてのさまざまな読書体験、大峰山脈での遭難事件、父や妹の死が追体験されることになり、結局自己とは何かという切実な問が問いつづけられるのである。時代が戦中と敗戦後の混乱期であるから、同時に時代と歴史の意味が鋭く問いかけられ、鋭敏な青年たちを捉える課題、哲学や文学や政治などに関心がむけられるのである。特筆すべきは、生と死、存在と無、文学と政治などが解き明かされようとしているにもかかわらず、仏教の影がきわめて薄いという点である。もとより、こうした精神の彷徨が後年仏教に接近させる要因になってはいるにしても、武田泰淳や野間宏などにおける仏教が骨がらみのものであるに比し、真継伸彦のそれは一種のゆるやかな入出家の志Vとよんでいいものだと思う。

彼がこの小説で、自分の魂の秘密をくまなくさらけだそうとしたり、ほんとうの自分を見出そうと意企したため、従来のごとくこの文学世界も重苦しい印象を拭いきれないが、ある面では一種のユーモアを獲得しているということが出来る。つまり、吃音に幼児から悩み、「瘡でき、小便たれ」の真津木少年が見ることから学ぼうとすることによって、自分と自分の置かれた状況を相当深く対象化し

たのだが、彼の自虐、真剣さ、ひたむきさが滑稽な一面を有するところを書きこんでしまっているからである。主人公と作者との距離という点からいえば、自伝的小説であるにもかかわらず、真津木のほうは、フィクションの主人公、蓮見、心源よりも突き放された位置にあるといっても誤解を与えないだろう。自分を八吹きざらしVにする主人公を描くことで、現実のある深部に降りたつことを可能にした作者の文学の深まりを覗見できるのではないか。私たちは、『無明』『青空』より深い小説的世界を今後に期待できるにちがいない。

真津木青年は、二七年六月の吹田事件に加わることで、自分の非暴力反戦主義のありようと人間的、思想的無力さを確認するとともに、「共産主義は、表は人間尊重の思想であって、裏は人間蔑視の運動であると痛感した」のだが、この共産主義理解が貫き通されている小説空間が『光る聲』（四一年一月、河出書房書下し長篇小説叢書）にほかならない。

断わるまでもなく、右の共産主義についての考えは、きわめて単純化されたものであって、この作品の諸人物たちの出自や経歴によってさまざまな側面を覗かせているのである。『光る聲』が提出している中心のテーマは、転向の核心に直接かかわっていて、必然的に個々の人物たちの精神生活と思想の形成過程が重視されているからである。ただし、この作品の背景となっている昭和三一年（一九五六）のハンガリー動乱がなぜ大きな意味をもっているか概略のべておくべきであろう。作品の骨組は、書き手の松本清次が、昭和三九年に「共産党の敗北と、さらに悪いものの出現」に衝撃をうけ、

彼自身の理解によれば、この敗北のきっかけの一つとなったのは、ハンガリー動乱に際して生じた彼の恩師・中川一雄のきびしい党批判と脱党にいたる党細胞の混乱と瓦解に要因をもとめるので、この間の経緯を辿り直す体裁をとったものである。ハンガリー動乱のちに詳述するように、国際共産主義運動にあって非常に大きな影響を与えた事件であった。スペイン市民戦争、独ソ不可侵条約、戦後処理問題、スターリン批判からポズナニ、ブダペストの動乱へとつづく一連の動向、中ソ論争等に於て生じた思想的、政治的混乱や錯誤をどのように評価するか、それぞれ難しい問題をはらんでいるからである。

ハンガリー動乱に敏感に反応した中川の感受性や発想や思想などの形成過程が詳しく辿られるのも、右のような状況にあって当然の筋道だといえるだろう。彼のいわゆる運動歴は平凡なものである。高校時代神経衰弱になって自殺ばかり考えていた無気力な青年が、時代の波にもまれて昭和七年の大学時代に反戦運動のピラ配布によって逮捕され、誓約書を提出して釈放された経験、教員になってから学徒出陣で出征する教え子に反戦思想を語ったために逮捕された経験程度で、特にめざましいものではない。もとより戦争中の抵抗運動のありようを考慮せずには多くを語りえないが、彼自身の自覚に於ても、自分は革命運動、反戦運動の外側において、「何もするところがない」という自責の念にとらわれつづける精神状態であった。彼が釈放後に敗戦を迎え、留置場で重症におちいった病軀が癒えてのちに共産党に入党して彼なりの献身をつづけたのも、戦中の無惨な体験の故である。

彼がハンガリー動乱でソ連の武力介入に強く反対した事に、私たち読者は十分説得されるわけではない。また、彼のスペイン市民戦争、東欧の戦後処理問題、フルシチョフのスターリン批判等においてもその立論に疑念を抱くこともできる。彼の立場がヒューマニズムの色彩の濃いものだとすれば、彼が入党して以後、党のとった民主主義革命論、民族解放民主革命論に立脚したさまざまな闘争において露呈された反人間的、非民主的、非共産主義的な事態に反対しつづけていなければならなかつたはずである。この事を念頭において、動乱勃発当時の発言のいくつかをふり返ってみておこう。

フルシチョフの秘密報告に先立って、本質的な面からスターリン批判、一国社会主義批判を展開していた埴谷雄高の「永久革命者の悲哀」「闇のなかの自己革命」については触れず、ハンガリー問題のみに限って素描しよう。彼は次のようにいう。

「チトー問題も、スターリン批判も、ハンガリーの悲劇も、同じ根から生れた多面的な現象だと思ふ。(中略)社会主義における政治体制の矛盾のかたちを見出し得ないために、矛盾はスターリン個人の性格と頭脳に負わされてしまつて、そのスターリンを支えていた根本的な矛盾は行方不明になつてゐる。(中略)ハンガリア問題で、特殊的な要因として出たのは、労働者評議会です。軍隊介入を除くと、これに一番集中的に矛盾が現われたと思ふ。大衆は社会主義建設の発展につれて、自己による自己の支配の形態に次第に成熟して共産主義的意識を自己の内部に消化し高めていく。その発展の段階に応じて、政治の機構も並行して改められるのが当然だと思ふ。にもかかわらず、労働者の権力保持と政治

の機構との間にギャップがあつて、社会主義後十年もたつて革命的手段によつて評議会を作らねばならないということは、いかにこれまでの矛盾が激しかったかを証明して余りあると思ふ。」「(現代革命の展望)

埴谷雄高が労働者評議会の問題に的をしばつたのは卓見である。この座談会で丸山真男がいうように、鋭敏な感性をもつマルクス主義者の間で問題を根本的に考察する気運が高まつたとき、ソ連、カダル政府の公式発表、「人民日報」の論文でソ連介入の正当性がおしだされて、反対の立場はすべて「修正主義」として片づけられてしまつた情勢で、右のような本質的な発言は忘れがたいだろう。作中に「人民日報」の文章の一部が引用されているので重複をさけ、念のため毛沢東の五六年十一月の発言を引用して公式見解を示しておこう。「ポーランドにせよ、ハンガリーにせよ、火だねがある以上、いつかは燃えあがる。燃えあがつたほうがいいのか、それとも燃えないほうがいいのか。紙は火を包むことができない。いま燃えあがつたが、そのほうがいいのだ。ハンガリーにあれば多くの反革命がいることが、これでいっぺんに暴露された。ハンガリー事件は、ハンガリー人民を教育したし、同時にソ連の一部の同志を教育し、われわれ中国の同志をも教育した。」「(中国共産党第八期中央委員会第二回総会での演説)彼は、プロレタリア階級を鍛えていないし、敵と味方、観念論と唯物論とを区別しなかつたとも演説するが、埴谷雄高が「労働者評議会」を重視し、彼が「反革命」と批判したのは象徴的な対照である。

サルトルは両者の中間に位置している。彼はハンガリーのコミュニ

ニストがソ連のコミニストの弾丸のもとに倒れたことにスターリン主義の臨終の苦しみをみた。彼はフランス左翼の統一を実現するために、非スターリン化、ソ連との関係において平等であること、情報の真実性、民主化などが効果的政策であると考えた。

「ソ連はハンガリーにおいてハンガリー社会主義を守ろうとした、ということを感じたい誰に信じさせようとしたのだろうか？ ソ連がそうすることを考えたとしたら、なんという無邪気さ、なんという失敗であるか！ ソ連はいかなる利益をえたのか？ なんと一つない。なにを失ったか？ すべてを、だ。ソ連は人々の心の中に憎しみを生まれさせた。この憎しみはすぐに消え去るものではないし、反動に役立つ。ソ連は永遠にハンガリー共産党を失格させ、党名を変えて己れ自身を否定することを余儀なくさせた。それは経済を破滅させ、経済の再建のために全人民の積極的協力を必要としたとき、大衆を政府に対立させてしまったのだ。」
〔スターリンの亡霊〕 白井浩司訳〕

サルトルのハンガリー動乱についての分析は、スターリン主義の分析として詳細的確である。メルロー・ポンティもよく似た分析をしているが、サルトルの意図がフランスにおける社会主義建設のためのスターリン主義の批判であるのと異なって、彼の批判はより本質的である。つまり、サルトルがスターリン主義を社会主義の偏向でなく、環境によって強制された迂回だとみなすのに対し、彼は次のようにのべる。「ハンガリーの共産主義者の蜂起が意味しているのは、スターリニズムが体制の社会主義の本質にまで達したと、非スターリン化は、体制内では修正とか戦術の変更とかではな

くて根本的な変革であり、そこに体制の生死がかかっていること、にも拘らずもし体制が名誉を回復しなければならぬとすればそれをやり遂げざるを得ないことである。」「〔非スターリン化について〕朝比奈諄訳〕彼のいう根本的な変革という見解は、埴谷雄高の労働者評議会とともにその後まったく無視された発想の一つだといえる。スターリン主義が延命しているからである。

私が煩をいとわず代表的な考えを素描した理由は、それらの思考内容のうちに、その当時のマルクス主義、スターリン主義などを根本的に考え直さざるをえなくなる重要な批判がこめられているからである。それが国際的見地からみても、国内的動向からしても、いわゆる「転向」の重大な契機となったことも断わるまでもない。

先に中川の態度決定に疑念を呈したが、彼の十年ほどの戦後責任の自己検証の一帰結とみれば解らないことはない。彼は心が晴れたことは一度もなく、「党の情勢判断や政策を、心から正しいと思つたことは一度もない」のだから、党の結束を守るために嘘ばかりついできたと反省している。彼が党を「阿呆」で反人間的だ、と叫びたいと考え、党にとどまることは「無能の上に破廉恥」だと感じはじめたのも、ハンガリー事件の彼のそれなりにすぐれた分析を知れば納得いくようになるだろう。特に彼のもっとも近くにいた弟子の松本の、公式的、官僚的対応に接すれば接するほどその思いは加速されたはずである。とはいえ、松本は蓮崇・心源的な布教者（実践者）と同じく余りにも政治主義的、非人間的、功利主義的に描かれすぎていくらいがあるように思う。

既述のごとく、中川の動乱についての論理は、作者の資料整理に

よって明確で詳細なものだが、動乱直後のいくらかの見解を素描しておいたので繰り返すまでもなからう。この小論のモチーフに従えば、彼と知人のいくらかの転向の論理Vを跡づけておくことである。中川が脱党を決意するに至る期間のはかりしれぬ苦悩はその不眠に於てよく示されているにしても、また細胞会議の制裁や処分を容認するにしても、彼はおそらく脱党ニ転向と考えてはいないはずである。彼が「スターリニズムはぼくらの未来におそってくる」、「目的のために手段をえらばぬ国際共産主義運動」、「今後は自由な立場で、ソ連共産党の非道を告発しつつける」等とのべている点に明白である。これらは脱党の際の常套句であるにせよ、彼の転向は純粹に国内外のスターリン主義にかかわるものにはかならない。作者は二年ほど後に彼を病死させてしまっているのも、もっとも肝腎な彼のその後の人間的・思想的な闘いが評価できないが、戦前に於て佐野・鍋山が「コミンタンの政治及び組織原則」に対して批判しつつ転向したのとは異なっているはずである。彼らの批判は現在では一種のスターリン主義批判の要素を内在させていて、部分的な妥当性を有しているが、その全体的な論理とその後の足取りが、典型的な戦前型転向のありようを語っているからである。

こういう点からして、典型的な転向といえるのは、「中川教授より立派な反戦運動の経歴の持主」の田代が歴史を信じられなくなつて「歴史の創造行為から離脱する」と宣して脱党した例と、戦争中の大井守の生き方に見られる。大井は上すべりの唯物史観からではなく日本史を新しく見直す「研究のために背信」して転向誓約書をかいた。彼は「裁くことができるのは共産主義のみ」という覚悟の

もとで、『日本中世史論集』に集約される論文をかつて「新しい国史学の草分けとなった」点に於て、「転向」の積極的な型をうちだしたといえよう。知識人の転向に多い田代型と恰好の対照なのである。そして、松本にとって問題なのは「スターリニズムの悪に絶望して脱党する者は、その悪の出現を許し、彼の友人の竹中の転向を助長する事である。彼における悪とは、共産党を敗北させる新興宗教団体とその政治組織なのだが、松本的な非転向軸が否定されてしまえば、彼らが日本の近代、資本主義、民衆のイメージや欲求、社会主義や共産主義、国際関係などを全体的に捉ええない思想的、政治的惨状を語っているだけなのである。作者の真継伸彦にとってこの共産主義（政治）と宗教の問題は重大なものであるにしても、そして、それが転向の一つの型を示しているにしても、この転向は戦前型転向の一代代表例なのだから、ここでは省略する。

中川の転向が昭和三〇年代の重要な文学的、思想的な課題となつたことは改めてくりかえすまでもない。思想のさまざまな受難を作家たちは正面からあるいは搦手から描出して多くの成果をあげてきたのだが、真継伸彦もその一人にほかならない。歴史上の事実を材をかりつつ、人間の受苦と受難の諸相を虚構世界に展開する彼の志向がこれからのような領域へと到達するか予測できないが、その世界が既述のA或る力Vを獲得するよう願う。ともあれ、スターリン主義批判の問題を人間の感受性、思惟法、对他意識などからイデオロギーの領域にわたって取りあつた『光る聲』は、中川の病死、松本の描き方等に不十分な面がなくもないが、今後も読みつがれるべき作品の一つである。（文学部教授）